五力用水物語

文・幅房子
絵・荒井泰三

ごかようすいものがたり
五カ用水物語

文　幅　房子
絵　荒井　泰三

①

この五カ用水は、明科の上押野から塩川原、荻原、中村を通って小泉までの水田に水を配り、たくさんの米を実らせてきました。この用水ができるまで、小泉や中村はほとんど水田がなく「どうかして米を作りたい」という村人達の長い間の願いがこの用水によって始めて叶えられました。

この用水を作るのは大変な難事業でしたが、小泉村の牛越茂左衛門、中村の遠藤丈四郎の二人の庄屋が先にたち、大勢の村人達の努力で完成しました。

それから百八十年。今もこの用水に水が流れ続けています。

これはこの用水ができるまでのお話です。

五カ用水物語　～紙芝居版　12 場面

平成 24 年 3 月 11 日　　初版・第 1 刷

文　幅　房子（安曇野市明科）
絵　荒井　泰三（大町市）
編集・発行
ふるさとの水と食と文化を考える会・ＹＡＭ
（安曇野市明科）
TEL・FAX　0263（62）3843
yam@azumino-yam.com
製作　あづみ野企画（安曇野市堀金）
©2012 YAM / Fusako Haba / Taizo Arai　Printed in Japan

安曇野市豊科図書館

②

茂左衛門と丈四郎二人の若い庄屋は、池田組の庄屋の会合にはいつも連れ立って中山を越えます。中山の尾根から見下ろすと、中村や小泉のある東側は、底の方に犀川が流れているのに水田は見えず、西側には満々と水を湛えた水田が広がっています。

茂左衛門「昔はあそこら辺も水のない畑地だったが、百五十年前に岡堰が引かれて水田が出来てから、村の暮らしはぐんと楽になったそうだ」

丈四郎「茂左衛門どの、わしも村のためになんとしても水を引きたいのです」

茂左衛門「昔から果たされなかった夢だけれど、わし等二人命がけで頑張ってやりとげましょう」

二人は、力を合わせることを堅く誓いました。

作者紹介：文　幅　房子

長野県大町市出身。
長野師範学校卒業後、小学校、幼稚園等に勤務。
退職後、「信濃子どもの本創作研究会」に入会し、農業のかたわら童話の創作を志す。
著書は『ビルマの砂』『青き流れに』『ビルマはるかなる空へ』いずれも理論社、『おばあちゃんのビルマ紀行』などがある。
2010年、この紙芝居の元となる『五カ用水物語　～小泉編』を著す。
安曇野市明科在住。

Waterless Printing. Naturally.

③

二人は水の豊かな岡堰から水を引こうと研究を重ね、途中の村々に呼びかけ藩に願い出ましたが、小泉までは距離が長い上、沢や谷が多いので、途中の荻原までしか工事は許されず、先にたって計画した茂左衛門達の村までは一滴の水も流れてこないのです。

何度頼んでも聞いてもらえません。

丈四郎「幾ら待っても駄目だとなれば、貯水池を造る以外にないですな」

茂左衛門「誰からの援助も望めませんが、わしらの力で出来る限りやってみましょう」

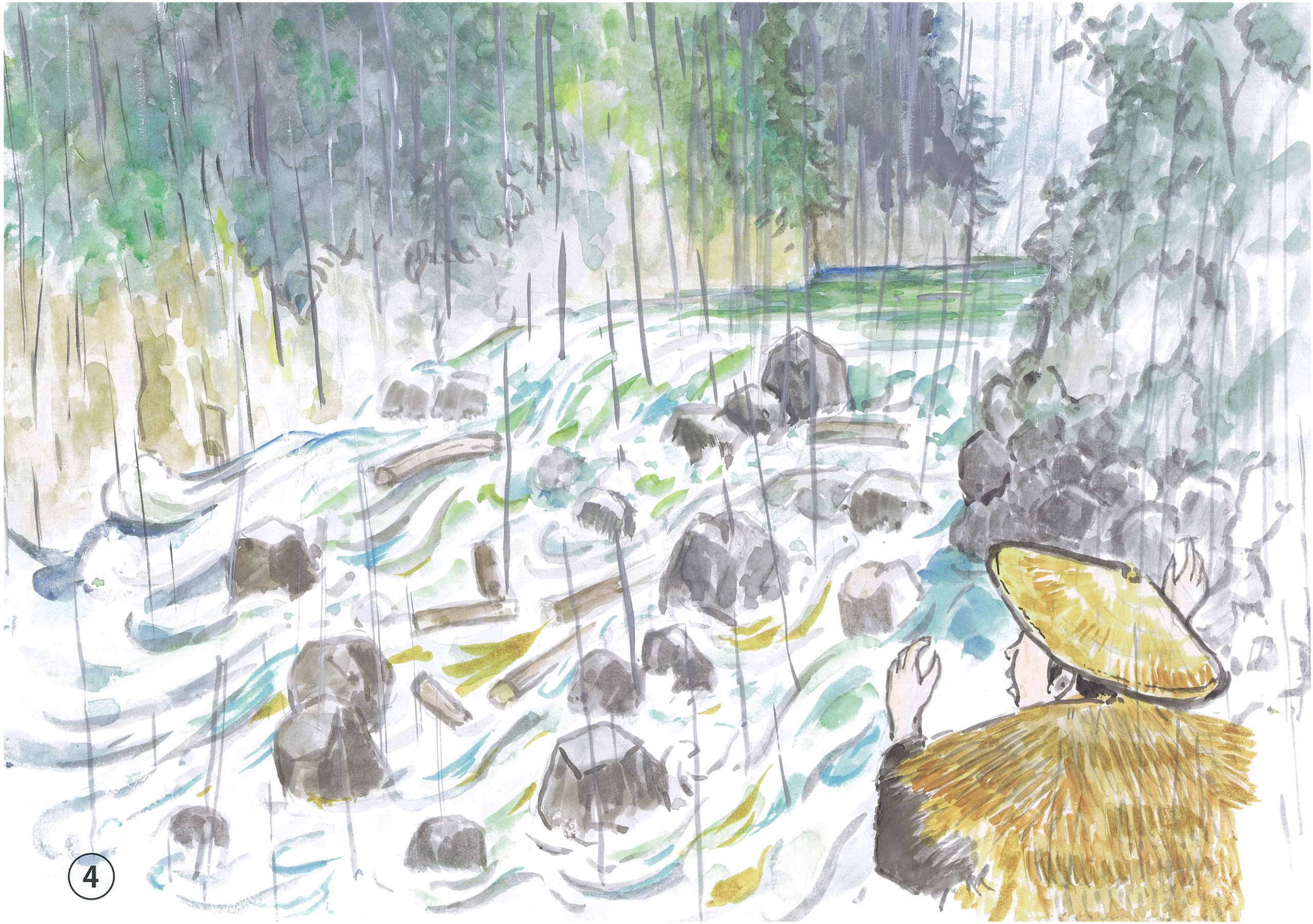
二人はお金を工面して人を雇い、大きな池を掘りました。

作者紹介：絵　荒井　泰三

1938年大町市生まれ。
新潟大学芸能科絵画科卒。
2004年3月まで高等学校美術教諭として勤務。
一水会会友、信州美術会会員、中信美術会委員。
「塩尻かるた」「大町民話かるた」絵札執筆、『あづみ野　大町の民話』『夢買い長者』挿絵、大町市観光絵葉書、白馬観光絵葉書、大町市年賀状などを担当。
大町市在住。

Waterless Printing, Naturally.

安曇野市豊科図書館



④

発行者　ふるさとの水と食と文化を考える会・ＹＡＭ

農薬を使わずに野菜、米を作り、販売しているＹＡＭ（Young Agriculture Mothers）を母体としてできた会が、ふるさとの水と食と文化を考える会になりました。

連絡先：yam@azumino-yam.com

ようやくできた貯水池に、水が貯まったころ、幾日も大雨が降りました。

「大変だー、庄屋さまー。池の堤防が崩れそうだっ」

ガラガラー　ゴロゴロー　ザッザザー

かけつけた二人の庄屋の目の前を、堤防を破った水が滝のような勢いで流れ落ち、池は姿を消していました。

二人は心を奮い立たせ、また池を作りなおしましたが、何回やっても大雨が降ると崩れるので、とうとう貯水池の夢は諦めました。

それからも用水のことはいつも頭にあった茂左衛門ですが、忙しい仕事に追われ、あっという間に三十年がたちました。

茂左衛門の髪には白髪が目立ち、気がつけば庄屋を受け継いだ時の父親の年を越えているのです。

安曇野市豊科図書館

5

茂左衛門は丈四郎をたずねました

茂左衛門「村人のために用水を引こうと誓いながら、それが叶わないまま老いていくわけにはいきません。今一度、あの誓いを背負い直して、改めて命掛けでやり遂げようではありませんか」

丈四郎「良くぞ言ってくださった。もとよりわしも同じ思いでおりますじゃ」

二人の心に、新しい決意が炎のように燃え上がっていきました。

それからの二人は何度も何度も調査を重ね、何度も何度も藩や周りの村々に願い出ました。断られても断られても願い出ました。根負けをした藩の役人や大庄屋達は、ついに小泉までの堰の工事を許可したのでした。

安曇野市豊科図書館

6

池田組三十三の村々から人が集められ工事が、始められました。木を切ったり、土を掘ったり、石を退かしたりと重労働が幾日も続くと、手伝いに駆り出されたよその村の人たちの不満が出てきて、仕事の手抜きばかりか、いやがらせをして喧嘩を仕掛けたり、終には工事を妨害する事件が起きてしまったのです。

それは、工事の最大の難所、深見沢に箱樋を架けるために、谷に橋を築いた時のことでした。深い谷に橋が渡って、みんな大喜びをしたその夜、橋の縄を切った者がいるのです。

村人「こんなことまでされちゃあ、へえ勘弁できねえ、引っ張り出してたたきのめせ」「そうだそうだ。たたきのめせ」

茂左衛門「二度とこんなことの起きないように、刀を差したお侍に工事の現場を見張ってもらおうと思うのですが」

丈四郎「それはいいかんがえですが、もう私の手元にはお侍に手当てを払うだけのお金がありません」

それはもう二人とも同じです。土地や山林を売ったお金も今までに使い果たし、侍を頼むお金などどこにもありはしません。見かねた村役の衆がお金を用意してくれましたが、松本藩には「庄屋は村人からお金を借りてはならない。それを破れば、庄屋の身分を取り上げる」という決まりがあるので、それには手を付けないできたのです。迷っている茂左衛門の心に声が響きました。

「お前は何を迷うのだ。先祖代々の用水の願いがやっと果たせる今になって。たとえ何もかも無くしてもきっと先祖達は許してくれる」、

茂左衛門の心は決まり真っ直ぐ前に突き進む覚悟ができました。

それからは見回りの侍のせいばかりではなく、茂左衛門たちの強い心や、水を待つ村人たちの気持ちが、よその村の人たちにまで伝わって、工事は捗り、とうとう三里もの用水堰が掘りあがりました。

Waterless Printing. Naturally.

7

小立野の岸からこっち側の斜面の暗い闇の中に点々と並ぶ赤い灯をみて、水路の高低を確かめた夜から半年が経っていました。

上押野の取り入れ口に集まった大勢の人々が見守る中、水門の栓は開かれ、流れ込んだ水はほとばしりながら新しい堰を流れていきました。でもその水はどこへ潜り込んだのかどんどん水かさが減り、押していく勢いが衰えてとうとう消えてしまったのです。

人々は落胆し、藩の役人はひどく腹を立てましたが、茂左衛門は慌てず、改修してからもう一度水を通す約束をしました。しかしその二度目の立会いの日も、堰の終わりの小泉村で待ち構えていた奉行の元まではなかなか水は来ませんでした。短気な奉行は水の来るのを待ちきれず、全員を集め大声で叫びました。

「この工事はじめから無理だと分かっていながら無理に始めたお前たちは、切腹して責任を取れ。われら奉行も今更おめおめとは帰れないので明朝切腹して詫びる」

雷のようにとどろき渡る奉行の声に、誰も何も言えませんでしたが、茂左衛門は心の中で呟いていました。

（わしらには水を通すことのほか、責任を果たす術はない。村に水が来るまで、切腹なんぞする暇もない）

安曇野市豊科図書館

8

明朝切腹と決めた奉行は、茂左衛門の家で、別れの宴を開きこの世の飲み納めとばかり酒を飲み酔いつぶれていきました。

話を聞いて集まって来た村人は、夕方から激しく降り出した雨を、切腹する茂左衛門たちの涙雨だと言って泣きましたが、一人の若者が叫んだのです。

「こりゃあ涙雨なんかであるものか。恵みの雨にちげえね え。爺ちゃんが言ってたぞ、雨降って地かたまるってさ」

「そうだそうだ。泣いてなんかいられるか、今夜のうちに水を連れて来なけりゃなんねえ」

「雨で濡れた土くれをおらたちの足でふんづけりゃ、水の逃げ出る隙は無くなるってもんだ」

「さあみんな、水を連れにいってこいや」

「おーっ」

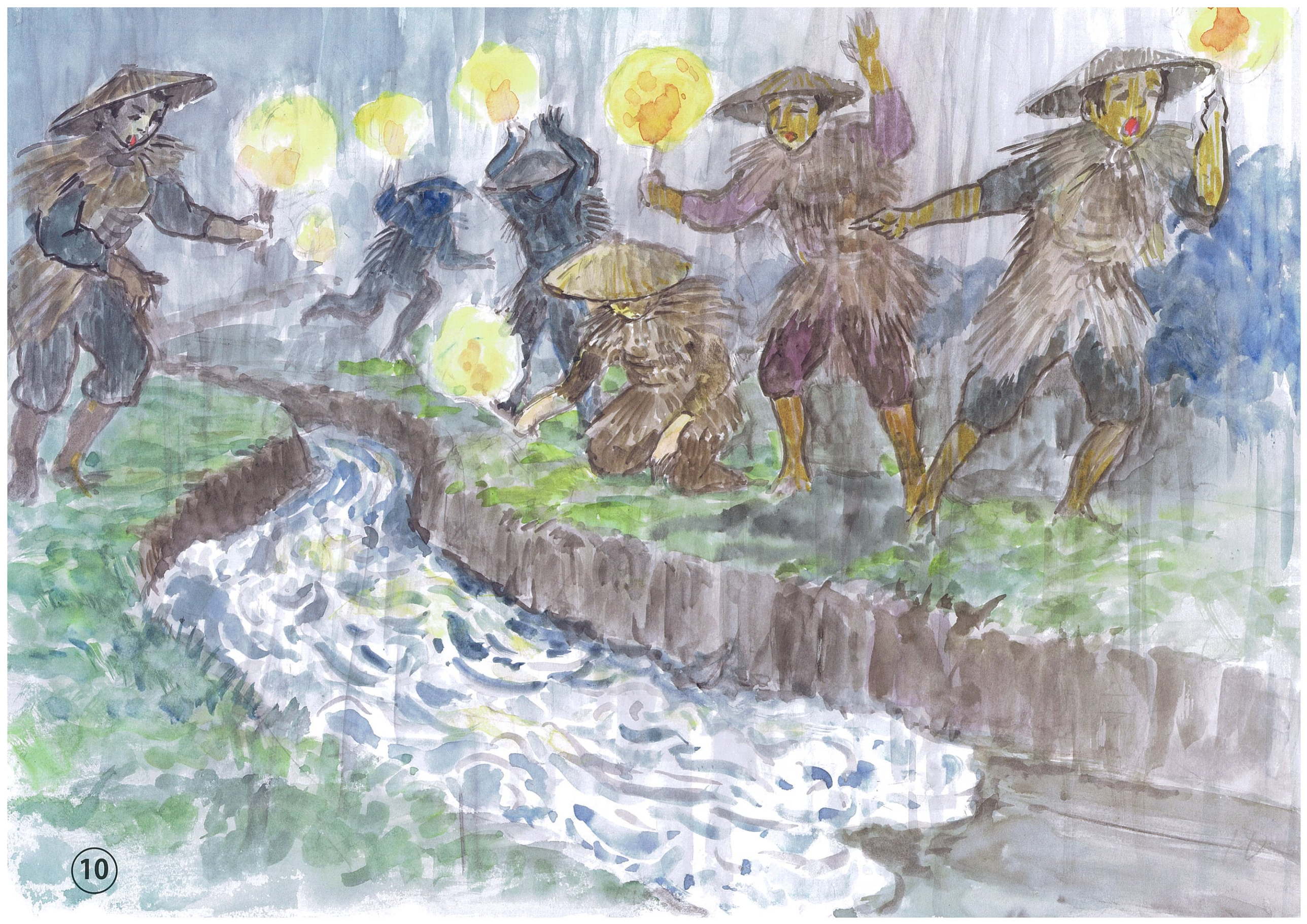
安曇野市豊科図書館

⑨

先を争って走り出した若者達は
雨の降りしきる堰の中に飛び込み、水の一滴も逃げないように
堰の壁を叩き、底の土を踏み固めて歩きました。周りの村の若
者も加わって取り入れ口まで踏み固めていきました。

Printing. Naturally.

安曇野市豊科図書館



⑩

「どうか神様仏様、庄屋様のところまで、この水、届けてお
くんなされ」

取り入れ口の栓を上げると、渦を巻いて流れ込んだ水はまっしぐらに堰の中を走ります。

押野、塩川原、荻原を越えても、水はますます水かさを増し、勢いづいて流れます。

若者達は足を滑らせ、堰の中や土手の下に転げ落ちながら水を追いました。

蜂が沢や深見沢の難所も見事に越えてとうとう水は中村から小泉村に入ったのです。

安曇野市豊科図書館

⑪

奉行たちが酔いつぶれるのを待って茂左衛門達が堰の土手に上ると、遠くに提灯の灯が見え、「庄屋さまー水がきましただー」という声がします。そしてつぎつぎと全身ずぶぬれの若者達が二人の周りに走りより、成り行きを話しました。

「そうか若者達が水を連れてきてくれたのか」

茂左衛門は胸に迫って声も出ません。黙ったまま提灯の灯をかざすと、その灯の下を、今三里の路を駆け抜けて北の端まで届いた水が、きらきらと光りながら勢いよく沢に流れ落ちていきました。

「水がきた」「水がきた」の声は、枯葉が燃え上がるほどの速さで村中に伝わり、村人たちは声を上げて家から飛び出し、用水土手に這い上がって水を迎えました。躍り上がる者、手を合わせて拝む者、堰にとび込む者。その喜びに満ちた村人たちの姿に、茂左衛門たちは今までの全てが報われたと思いました。

その年、中村、小泉だけで四十町歩の水田が出来、秋には二十俵ずつの米をお礼に藩に差し出すことが出来ました。

安曇野市豊科図書館

⑫

江戸に出ることに決めた茂左衛門（もざえもん）は、旅立ちの朝、もう一度用水の傍（かたわら）に立ちました。

「この村にはじめて水が来てからもう五年、毎年用水の手直しをしてきたが、やっと一段落した。あとはあの若者達が守ってくれる」

目をつぶれば頼もしげな若者達の顔が語りかけます。水田では生き生きと精を出す村人の姿があります。

全ての財産も、代々続いた庄屋の役も全て無くした茂左衛門ですが、心は静かに満たされていきました。

その日茂左衛門は身軽な旅人になって、新しい日本の夜明けの近い江戸を目指し、旅立って行ったのでした。

おわり

安曇野市豊科図書館